植物としての綿

綿（木綿、綿花）の木は、アオイ科に属する一年生草木です。花はとても清楚で、オクラや芙蓉（ふよう）の花によく似ています。開花した日には淡い黄色、翌日には薄い紅色と変化します。

はたおり関連事業のご案内

●気軽に体験したい方は…(事前申込不要)

【はたおり体験】

とき／毎月第２・４土曜日

午後１時～３時

【わたくり体験】

とき／毎年３、４月の土日

【糸つむぎ体験】

とき／８月の木曜日

●少し本格的に体験したい方は…

【はたおり教室・さきおり教室】

とき／年１回（全数回連続講座）

＊くわしい内容や日程、申込み方法についてはお問合せください。

★収穫した綿（めん）の利用について、お困りの方はご相談ください。

難波田城公園での綿づくり

綿（わた）（木綿、綿花）は木綿布の原料として、あるいは布団の綿として使われます。

この地方で綿の栽培がさかんだったのは、江戸時代の末から明治時代前半期のことです。その後、安価で良質の外国産綿花に押され、急速に衰退しましたが、第二次大戦前後までは農家の自給用として栽培されていました。

このことを物語ってくれたのは、市内の方から寄贈された一台の古い綿くり機でした。もう一度この道具をよみがえらせてみよう―昭和61年の考古館（資料館の前身）はそんな思いから“綿の栽培から機織りへ”の事業を始めました。

この活動は、同事業から誕生した「資料館友の会木綿部会」によって受け継がれています。難波田城公園内の畑で育てた綿から糸をつむぎ、その糸で布を織り上げています。

ご興味のある方は、活動の様子を見学することができますので、資料館にお問合せください。

綿（わた）を育てよう！

難波田城（なんばたじょう）
FUJIMI MUNICIPAL MUSEUM

富士見市立難波田城資料館
☎０４９－２５３－４６６４

◆◇◆ 綿（わた）の栽培方法◆◇◆

適　地　風通し・水はけ・日当たりのよい場所が適しています。酸性の土壌を嫌うので、種まきの１週間前に石灰をまき、土を中和させておきます。

＊鉢やプランターでも栽培できますが、大きく育ち根も長く伸びるので、幅があり深さもある鉢（直径 20cm 以上のもの）を使いましょう。畑の場合は、うね幅は 70～90cm 程度がよいでしょう。

肥　料　窒素系肥料（鶏糞、油粕など）が適しています。じかに種にふれない程度の深さに、鶏糞を少しまきます。

＊肥料のやり過ぎに注意しましょう！

種まき　４月下旬から５月中旬（平均気温 15℃くらいの頃）が適しています。種は一晩水に浸しておきます。鉢の場合は１鉢に２～４粒、畑の場合はうね幅と同じくらいの間隔をあけ、２～４粒ずつまきます。土は種が隠れる程度にかぶせます。

発　芽　種まきの後、３～６日で発芽します。

＊発芽までの間は鳥などに種を食べられないように注意しましょう！

成　長　発芽した芽が混んでいる場合には間引きをします。植え替えをする場合には、発芽後２週間以内にすませます。

１カ月～１カ月半ほどは 10cm くらいの丈でほとんど成長しません。この時期に根がはるのです。

梅雨が明け、気温が高くなり、日光量が多くなると急速に成長します。そのままにしておくと丈が 150cm くらいになりますが、50cm 程度にとどめるように摘芯（てきしん）をおこないます。枝は横にはらせるようにします。

＊水やりは、根のはる時期にやりすぎると根腐れをするので注意！また若木のうちは病虫害にかかりやすいのでとくに気をつけましょう。

開　花　７月下旬から８月にかけて咲き始め、次々と大型のきれいな花を咲かせます。

開絮（かいじょ）　開花してから 80～90 日ほどすると、大きくなった実がはじけて、白い繊維が顔を見せます。このことを開絮（かいじょ）といいます。

いよいよ収穫です。すぐに摘み取るのではなく、はじけた実から出た繊維がほころんで、手で触れるとすっと抜け落ちるくらいになったときに摘み取ります。種はこの繊維の中に入っています。

収穫した綿は、綿くりなどをして繊維と種に分けます。種は次の年まで保存し、春に同じようにしてまきましょう。